

2020年12月6日 礼拝説教要旨  
詩編講解説教39「わたしの行く末」  
詩編39：3～10、ルカ12：4～7

先週の第38編に続いて、この第39編も嘆きの詩編となります。幾つかの注解書が記すのは、おそらくこの詩人は病に犯されていて、自分の最期が近いことを悟っているということです。例えば「心は内に熱し、呻いて火と燃えた」（4節）というのは、熱にうなされた状態とも読み取ることができます。朦朧とした意識の中で、この人は神さまと向かい合っている。そこに祈りがあり、神さまとの対話があります。わたしたちも死の床に伏す時が必ず来ます。でもそこでこそ神さまと向かい合う。この詩人はまさにそういう経験をしております。

そしてそこで詩人は神さまに訴えています。「教えてください、主よ、わたしの行く末を」と。今日の説教題にもしましたが、わたしはこの「行く末」という言葉が心にとまりました。この「行く末」と訳された言葉は単に「終わり」という言葉です。つまりわたしの終わりを教えてくださいと詩人は神さまに訴えています。この命がいつ尽きるのか。どのような最期を迎えるのか。わたしたちも自分の行く末、終わりがどうなるか気になるのではないのでしょうか。

この詩人は自分の最期を意識しながら、その生涯を振り返っております。よく人生の最後に走馬灯のように人生が映し出されると言いますが、そのように人生を振り返っているのかもしれませんが、6、7節に注目してください。ここでは人生の儂さ、空しさが強調されているように感じます。この人がどれくらいの年齢なのかは分かりません。でもどんなに長生きしたとしても、その生涯は「僅か、手の幅ほどのもの」と言います。手の幅というのは、指4本分の幅のことです。それほど短いということです。「御前にはこの人生も無に等しい」とありますから、永遠なるお方、神さまの前に、限りあるわたしたちの存在は本当に無きに等しいものだということ。

またここにはこの詩人の人生における経験が反映されているように思います。「人は確かに立っているようでもすべて空しい」とあります。順風満帆の人生のように見えても、何かあれば一瞬で崩れ去るようなことがあります。仕事も家庭も健康も。現在のコロナ禍でまさにそういう経験をしている人も少なくありません。確かと思われた会社が、仕事が消えてしまう。そう考えると、この世に確かなものなど何一つないのであります。そういうこの世のものに依り頼む人生の空しさをこの詩人も経験しています。

また「空しくあくせくし、だれの手に渡るとも知らずに積み上げる」とあります。ある翻訳では「積み蓄えるが、だれのものになるかを知りません」これは富に関して言っていると理解できます。人はあくせく働いて富を得るかもしれない。でもそれが自分のものになるとは限らない。福音書の愚かな金持ちの譬え話を思い出します。十分に蓄えた金持ちに神さまが言われる。「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか」（ルカ12：20）富に執着し依り頼む人生もまた空しいということ。

こういうことは経験においても誰もが分かることではないのでしょうか。でも分かっているけれども、わたしたちはどういうわけかそういうこの世のものに傾いてしまう。永遠なるお方ではなく、この世の儂いものに依り頼む。そこに聖書の伝える人間の罪、弱さがあります。そして

そこにまたわたしたちの儂さの原因もあるのです。聖書は最初の人間アダムとエバからこの罪を負っていることを告げています。それゆえに人間は樂園を追われ死すべき存在になりました。「塵にすぎないお前は塵に戻る」(創世記13:19) 儂く消え去る存在。けれども物語はそれで終わりではない。それがわたしたちの最後、行く末ではないのです。

この儂い存在になったわたしたちのために神さまは何をなされたのか。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」(ヨハネ3:16) この儂い存在をどこまでも愛され、大切な独り子を与えられた。そして空しく、空っぽになってしまうこの人生を独り子の命で、愛で満たしてくださいました。その極みが十字架の死でありよみがえりの命です。儂く消えていく人生にご自身の全てを注ぎ込み、御前に真に価値のあるものとしてくださった。そういう存在として神さまのもとに帰る。そこにわたしたちの終わり、本当の行く末があります。

かつて森有正という人がおりました。政治家、森有礼(もりありのり)の孫に当たりますが、森有礼は、九州鹿児島出身でイギリスやアメリカに留学し、帰国後に伊藤博文の内閣で文部大臣をした人です。その人の息子が森明で牧師です。その息子が森有正といって哲学者、フランス文学の専門家で東大でも教えておりました。戦後フランスに渡りそこで亡くなりましたが、森有正はキリスト者で教会でもよく奉仕をされました。彼がこういうことを述べています。「神さまは、何千年たっても何万年たっても変わらぬ人間の愚かさ、その歴史の汚れと罪深さに自らうめき、祈って、神さま自身も祈って人類の歴史の中へ、独り子を送り込んだのです。大変なことですよ。それがクリスマスです。クリスマスは、我々の罪をあがなう出来事です」神さまが自らうめき、祈って御子を送り込んだと言います。神さまはこんな儂い塵のようなわたしたちのために悩み、苦しみ、祈って愛する独り子を与えられた。わたしたちの人生はそういう人生です。わたしたちもそういう経験があるでしょう。誰かのために悩んだり、心配したり。時にうめきながら祈ることもある。それは苦しいことかもしれません。でもそれはかけがえのないことです。それで満たされる人がいるのです。そのように誰かから心配されること、祈られること、それだけで人は十分生きていけるのです。

とにかく人生を空しく感じる人が多い世の中です。病を得たり、仕事を失ったり、特に今は世界中がこの季節のように寒く暗い冬の時代に入っています。けれどもその中でわたしたちは今年もクリスマスを祝うことができる。わたしたちの人生を空しく終わらせないために、神さまが尊い独り子をくださった。その愛で、恵みで満たしてくださいました。図らずもこの詩人は神さまに望みを託します。「主よ、それなら何に望みをかけたらよいのでしょうか。わたしはあなたを待ち望みます。あなたに背いたすべての罪からわたしを救い、神を知らぬ者というそしりを受けないようにしてください。わたしは黙し、口を開きません。あなたが計らってくださいませ。今年もクリスマスを祝うわたしたちはそこに望みを託しています。